

ハラスメントのない指導・組織を考える研修会（報告）

- ア 実施日時** 令和5年1月22日（日） 13:00 ~ 16:30
- イ 場所** サンラポーむらくも（松江市殿町369）
- ウ 参加者** 島根県バレーボール協会会員 その他スポーツ指導者 計33名
- エ 研修会講師** 大阪体育大学 土屋 裕睦 教授（体育科学博士）



公認心理師，スポーツメンタルトレーニング上級指導士。サッカー，野球等の日本代表チームや，国体チーム等にてメンタルトレーニング指導を担当。文部科学省「スポーツ指導者の資質能力向上のための有識者会議」（タスクフォース）委員，JSPO公認スポーツ指導者養成講習会におけるコーチデベロッパー。日本スポーツ心理学会理事長。

オ 研修概要

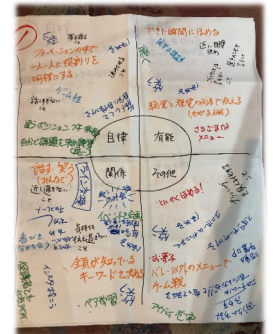
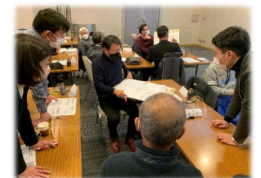
講義，ワークショップ

- 1, グッドコーチの条件・・・フラフープを使ったコーチング模擬実践，スキルチェック
- 2, 指導現場の課題とその対応法・・・「愛のムチ」や「指導者あるある」具体例
- 3, やる気を引き出す方法・・・自律，有能，関係性の3観点でのアイデア，シェアリング
- 4, 新しい時代にふさわしいコーチ・・・指導理念，哲学の学び合い，学びほぐし

カ 研修会を終えて

ハラスメント防止や，コンプライアンス遵守が叫ばれて久しいスポーツ指導現場であるが，残念ながら行き過ぎた指導やハラスメントなどのニュースを耳にする。今回は，体罰・ハラスメント根絶をテーマに，大阪体育大学教授の土屋先生にご講義いただいた。

グッドコーチの条件を探るため，参加者同士で「コーチング模擬実践」に挑戦。どうすれば，課題解決に向かえるか，コーチ役を立てて観察した。コーチ役の声掛けや指導法などに注目し，良いところを出し合って「グッドコーチ」のヒントを探った。プレーヤーをよく観察し，適切な指示をする，質問をする，ほめる，プレーヤー同士がアイデアを出し合い協働するのを待つなど，さまざまな指導があったが，どれもよい指導の一つであった。プレーヤーのやる気を引き出す方法を，ワールドカフェ方式でシェアリングする演習も行われたが，その中にも実践できそうな声掛けや良い関係の築き方の具体がいくつも挙げられていた。そこには「体罰」や「怒鳴る」という方法は見られなかった。スポーツを経験してきた私たちは，「グッドコーチの条件」を知っているのである。でも，なぜスポーツ指導の中の体罰は，根絶に至っていないのか。



土屋先生のお話の中で，「体罰（暴言）はお手軽な方法」と聞いた。手をあげる，怒鳴るは即効性のある方法であり，目の前にいる選手や子どもたちの姿が次の瞬間から明らかに変化する「お手軽」なものなのだ。やる気の見えない選手には，このような指導が必要な場合もあるとか，今までそれで強くなってきたという経験に基づいた考え方も散見されるようだ。しかし，プレーヤーを育てていく私たちが，その「お手軽な方法」にすがってよいものか。上手いかない，できない，伝わらないことは，プレーヤーの責任ではなく，指導者としてのスキルが足りないからではないか。目の前の選手や子どもたちと真摯に向き合い，子どもたちのやる気に火がつけられるよう，自分のコーチングを常に振り返って，スポーツから得られる楽しさや喜びを伝えていかなければならない。これからの時代に即した，バレーボールの魅力を感じ，より良い文化の創造に向かって指導方法を考える必要があると再認識させられた。

そう考えると，グッドコーチになるには，指導者自身のアップデートが必要で，そのゴールはないように思う。土屋先生の言葉をお借りすると，「指導理念・哲学の学び合い・学びほぐし」が必要なのだと思う。「やってよい体罰は一切ない。愛のムチは，単なる無知。」そんな気持ちで，指導者一人一人が体罰根絶に向かって，長期的にプレーヤー（子どもたち）を育てるボトムアップの指導へと，舵を切っていかなければならない。

終わりに，演習を交え，科学的理論に基づいた分かりやすい研修をしてくださった土屋裕睦先生に感謝し，多くの指導者と思いを共有し，明るい未来に向けて，一歩踏み出せたと感じる事ができた研修会であった。